

派遣研究員

氏名	程亮
所属	歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
派遣期間	2016年11月15日～2016年12月4日
派遣先	中山大学中国非物質文化遺産研究中心
研究課題	中国の歴史文献から見る狐仙信仰の展開 —湖北省の地方文献を中心に



清朝、民国の地方志における狐仙信仰の諸相

—愛如生「中国方志庫」データベースに基づく—考察

程亮

はじめに

狐仙信仰は中国北方地域における最も普遍的な民間信仰の一つで、その性格や漢族の民間信仰体系における位置づけなどについては、まだ定説がない。

狐仙信仰の民俗学・人類学的な報告や研究については、東北地方と華北地方を中心になされてきた。筆者は2014年から2016年まで狐仙信仰の調査空白地帯である湖北省西北部の山村地帯に入り、十堰市W村、S村、H堡、L村の狐精故事¹⁾の採集と狐仙祭祀、邪症治療の実地調査を行ってきた。

これまでの調査は、狐仙信仰の現在に着眼したもので、通時的な視点が含まれていなかったため、中国の歴史文献や地方志に目を向けたのである。2016年11月

15日から12月4日まで、筆者は非文字資料研究センターの派遣研究員として、中国・広州にある中山大学非物質文化遺産研究センターを訪問し、中国漢民族の狐仙信仰に関わる歴史文献の調査を行った。また湖北省の地方文献における狐仙信仰の記録を明らかにすることを目的として、武漢・湖北省図書館地方文献部、十堰市図書館地方文献センター、十堰市群衆芸術館非物質遺産保護センター、十堰・漢江師範学院漢水文化研究基地を訪れ文献調査を行った。

本稿では、中山大学図書館が提供しているデータベース「中国方志庫」を利用し、「狐仙」というキーワードで検索・抽出したデータに基づき、清朝、中華民国時期の地方志に記載される狐仙信仰の諸相を明らかにしたい。

1 「中国方志庫」とは

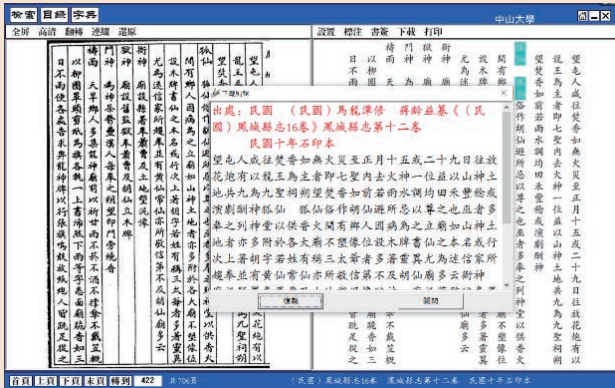
「中国方志庫」(図1)は中国の企業「愛如生(Erudition)」²⁾が製作した大型データベースである。漢代から民国初頭までの1万種にのぼる地方志類の著作を、原版の図像を付して収録する。

地方志とは「州や県など一地域を単位とした中国の総合的地理書」³⁾である。後漢時代以降、簡単な地図を伴った郡や国の地理的叙述〈図経〉が作られ、また特定地方の山川、風俗、古跡などを記載した〈風俗伝〉や〈風土記〉と呼ばれる地理書が出現した。いずれも地方志の原型といえる。4世紀、北方の異民族に追われ、漢民族が新天地の江南にうつると、その地方を対象とした〈某々郡志〉〈某々州記〉といった地方史が増加する。このように、全国地理総志、各省府州県志、村鎮里巷志、



●図1 愛如生の大型データベース「中国方志庫」





● 図2、3 「狐仙」のキーワードで「中国方志庫」からデータを検索・抽出

山岳川瀆志、辺防関隘志、都城坊肆志、寺觀書院志、風俗郷土志などを含む地方志は、中国の歴史沿革、山川形勢、行政建置、財賦収入、物産資源、人文景觀、災異禍乱、郷土風俗などを詳細に記述する貴重な資料となる。また、地方志は地方に伝わる伝承や各地で保管する公文書資料も情報源とするほか、実地調査も行つたうえで編纂されていることが多いため、地方に関する詳細な情報を入手しやすくなる。

齊藤まや（2010）の調査では、「地方志は刊行された年代によって2種に大別できる。1種は旧方志と呼ばれ、中華民国期までに編纂された地方志である。もう1種は新方志と呼ばれ、1949年の中華人民共和国成立以降に編纂された地方志である」とある⁴⁾。

「中国方志庫」は、漢代から民国までに刊行された旧地方志1万点を収録し、版本画像データ（1200万頁）とテキストデータ（20億字）を収録する。フリーワードによる「区域検索」、「条目検索」（書名、作者、時代、版元、篇目）、「全文検索」が可能であり、繁簡体字の変換、句読点・注釈の付加、テキストデータの保存・印刷という機能も付いている。「中国方志庫」は第1集、第2集、第3集、第4集、第5集に分けて出版・販売の予定であるが、各集に2000点の文献が収録されている。2006年に第1集、2014年に第2集が出版されており、2017年に第3集、第4集が出版される予定である。

今回、筆者が調査を行った中山大学図書館では、「中国方志庫」第1集だけが所蔵されている。図書館のスタッフによると、「中国方志庫」第1集、第2集を所蔵する大学図書館は山東大学と中国人民大学の2か所だということである。

II 「地方志における狐仙」データベースの作成

本稿では、中山大学図書館が提供しているデータベース「中国方志庫」第1集を利用し、「狐仙」、「胡仙」⁵⁾と

いうキーワードで検索・抽出したデータに基づき、清朝、中華民国時期の地方志に記載される狐仙信仰の諸相を明らかにしたい。

「中国方志庫」第1集に収録されるのは宋、元、明、清と民国のものであり、そのうち、明、清のものが多い⁶⁾。「中国方志庫」データベースを使用する利点は、狐仙に関するデータ数が極めて多く、かつ網羅的な点である。筆者は、中山大学図書館より、「中国方志庫」第1集の使用許可を得て、「地方志における狐仙」データベース（以下は狐仙DBと略す）を作成した。

なお、「狐仙DB」の作業過程は下記のようになる。まず、「中国方志庫」第1集データベースから「狐仙」というキーワードで51件のデータ、「胡仙」というキーワードで158件のデータを検索・抽出し（図2、3）、合計209件の事例を持つ「狐仙DB」を作成した。「狐仙DB」の各項目はデータベース番号・原文（中国語）・要約（日本語）・発生時期・発生地域・執筆著者・出版・版元の順になっている。その上、以下のデータを「狐仙DB」から削除した。

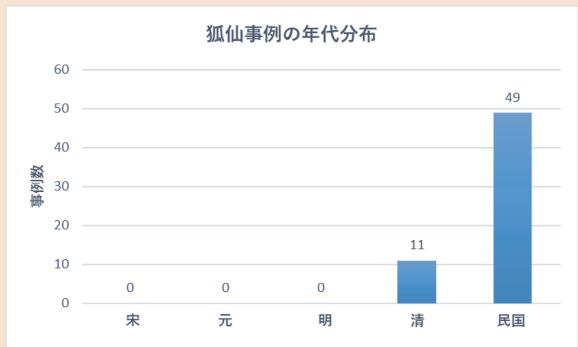
- 各項目が重複するデータ
- 同一事例のデータ
- 原文が不十分で内容を把握できないデータ
- 狐と関係を持たないデータ⁷⁾

このように、合計149件のデータを削除し、「狐仙DB」（図4 事例60件）を完成させたのである。

上述した「狐仙DB」を利用し、狐仙に関する60件のデータに基づき、狐仙の年代分布、狐仙の地域分布、狐精故事の類型、狐仙祭祀の類型、巫医治療との関連という五つの視点から狐仙信仰の諸相について分析を行いたい。本稿では、まず「年代分布」と「地域分布」を中心に考察を行うことにする。



● 図4 「地方志における狐仙」データベース



● 図5 狐仙事例の年代分布図

III 地方志における狐仙信仰の諸相

(1) 狐仙の年代分布

まず、狐仙事例の年代分布を見てみる。図5は「狐仙DB」における年代分布図である。宋、元、明朝の地方志では、「狐仙」、「胡仙」のキーワードで事例を検索することができなかった。一方、清朝の地方志では11件、民国の地方志では49件ある。狐仙事例が清朝、民国の地方志において最も集中していることが明らかになった。

なぜ、これほどまでに狐仙事例が清、民国の地方志に集中するのであろうか。これは、唐、宋時代に流行っていた狐神信仰が明、清時代に入って徐々に廃れていき、そのうち「狐仙」という形で民間に受け入れられたためと考えられる。換言すれば、狐仙という概念が唐、宋時代には存在せず、明、清時代に生成した可能性が高いと思われる。胡堃(1992)は、明、清時代の狐信仰について、次のように述べている。

総体的に見れば、明清の狐信仰は、つまるところすでに凋落へ向かっていた。唐宋時代の人々が興味津々で喜んで話した狐神は、明清時代の人の眼には一文の値うちもない。狐はすでに一人だけ人々から叩頭の礼を受ける特殊な荣誉を享受できるような神の宝座に

雄々しく坐っておれなくなった。狐神が人に禍福をおよぼす神力に対し懐疑し否定しようとする力が増長してくると、その地位が下落するのは必然の趨勢となった。人々はもう狐を神と呼ぶなくなり、ただ「狐仙」という名称しか冠しなかった。彼らの見方からすれば、狐は一定時期の修練を経過して仙となれるのである。それは人の形に変幻できるし、いろいろな神通力を持っているが、しかし全く恩を施し幸福を播く神霊ではない。狐神から狐仙への移行は、ただ狐信仰の民俗信仰世界での降格を明示するのみならず、中国古代狐信仰変遷史上における第三回目の重要な転回点であることを特徴づける⁸⁾。

胡堃(1992)は中国古代狐信仰がその変遷史において3回の転回があると主張している。具体的には、魏晋南北朝時代における狐妖人化(自然界の動物から人間世界で変幻可能な狐妖への転回)、唐時代における狐の神霊化(動物の精霊、妖怪から人格を持つ神霊への転回)と明清時代における狐の仙化(狐神から狐仙への転回)である。

「仙」は道教が持つ独特の観念であり、「山中で修行して不老不死の術を修めた人」を意味している。民間では、道教の「仙」観念が狐信仰に利用されると推測できる。山に生息している狐が山中で長年の修行をして不老不死、変幻自在の術を修めたら狐仙になると思われる。李剣国(2002)の研究では、狐仙概念の歴史的展開を3段階に分けている。「唐時代に狐仙の観念が始まったが、狐仙という概念がまだ成立していない。明中後期では狐仙の観念が強まり、初めて狐仙という概念が成立した。清に入ると、狐仙信仰が広く受け入れられるようになった⁹⁾という結論だった。

李の結論は筆者の統計結果とほぼ同様である。明朝の地方志に記載されるものがほぼ前時代の事情であるため、明朝中後期に強まった狐仙の観念が結局明朝の地方志に反映されず、清朝の地方志に反映されたのだと推測できる。また、清朝に広く受け入れられた狐仙信仰に関わる記載も次の民国地方志に反映されたのだと考えられる。

(2) 狐仙の地域分布

次に、狐仙事例の地域分布を見てみる。表1は「狐仙DB」における狐仙事例の地域分布表で、地方志に記載される事例の発生地域を新中国成立(1949年)後の行政単位に変換してまとめたものである。例として、地方志の「涇縣」を現在の「安徽省宣城市」に、「房縣」を現在の「湖北省十堰市房県」に変換することにする。表1を見れば分かるように、狐仙に関わる記述は東北



●表 1 狐仙事例の地域分布表

エリア	東北地方			華北地方		西北地方		華東地方					華中地方		西南地方			華南地方	全国	
	遼寧	吉林	黒龍江	河北	北京	甘肅	陝西	福建	江蘇	江西	山東	浙江	安徽	湖北	湖南	四川	貴州	雲南		広東
事件数	18	9	6	2	1	2	1	2	2	2	2	1	1	4	1	2	2	1	1	
合計	33			3		3		10					5		5			1	60	

地方（遼寧、吉林、黒龍江）、華北地方（河北、北京）、西北地方（甘肅、陝西）、華東地方（福建、江蘇、江西、山東、浙江、安徽）、華中地方（湖北、湖南）、西南地方（四川、貴州、雲南）、華南地方（広東）の中国全土にわたる。そのうち、東北地方の黒龍江、吉林と遼寧が圧倒的に多く、そのエリアにおける狐仙事例数が33あり、全体の半数以上を占めている。地域別に見れば、遼寧省は最も多く、18例ある。筆者が調査した湖北省は4例あり、東北地方の3省を除けば最も多い地域である。

これまでの先行研究では、東北地方、華北地方を調査地域とするものが最も多かった。例えば、瀧澤俊亮（1982 [1941]）や内田智雄（1970）による満州胡（狐）仙信仰の現地報告、劉正愛（2003）による遼寧省の胡仙信仰の調査、李慰祖（1941）による北京西郊四大門信仰¹⁰の調査、山本斌（1975）による河北省胡仙信仰の記述、周星（2011）による河北省の現地調査などがあげられる。1940年代（瀧澤俊亮、李慰祖）、1970年代（内田智雄、山本斌）、2000年代（劉正愛、周星）というように、30年ごとに狐仙信仰に対する調査がなされてきたのである。しかし、これまでの調査報告はいずれも民国以降のものであり、民国前の記述を含んでいない。今回、筆者が清、民国の地方志から抽出した事例に民国前の東北地方と華北地方におけるものが数多くあり、これまでの狐仙信仰の先行研究を補足することができる。

また、清、民国の地方志に、筆者が現地調査を行った湖北省のものが4件あるが、それに狐仙祭祀の実態を記録するものではなく、狐仙の憑依譚や怪異譚など「狐精故事」に分類できそうなものである。筆者が調査した湖北省十堰市W村では、類似する「狐精故事」がある。地方志は現地調査も行ったうえで編纂されているという特徴を持っているため、清、民国の湖北省地方志における「狐精故事」も、房県の民間から採集された可能性が高いと考えられる。したがって、W村で伝承されている「狐精故事」も清、民国時代を経て今日まで伝わ

ってきたものと推測できる。

おわりに

本稿では、中山大学図書館が提供しているデータベース「中国方志庫」第1集を利用し、「狐仙／胡仙」というキーワードで検索・抽出した60件の狐仙事例に基づき、狐仙事例の年代分布と地域分布を明らかにした。

まず、狐仙事例は清、民国の地方志に集中していることが分かる。これは、明朝の地方志に記載されるものがほぼ前時代の事情であるため、明朝中後期に強まった狐仙の観念が結局明朝の地方志に反映されず、清朝の地方志に反映されたのだと推測できる。また、清朝に広く受け入れられた狐仙信仰に関わる記載も次の民国地方志に反映されたのだと考えられる。

また、狐仙に関わる記述は東北地方（遼寧、吉林、黒龍江）、華北地方（河北、北京）、西北地方（甘肅、陝西）、華東地方（福建、江蘇、江西、山東、浙江、安徽）、華中地方（湖北、湖南）、西南地方（四川、貴州、雲南）、華南地方（広東）の中国全土に分布することが分かる。これまでの研究では、狐仙信仰は中国北方地域における普遍的な民間信仰の一つだと主張する意見が多いが、清、民国の地方志によれば、狐仙信仰は中国全土にわたる民間信仰であることが明らかになった。

本稿は狐仙事例の年代分布と地域分布を中心に考察を行ったが、狐精故事の類型、狐仙祭祀の類型、巫医治療との関連という三つの視点がまだ課題として残っている。更に、山東大学、中国人民大学図書館に所蔵されている「中国方志庫」第2集を利用し、より多くの狐仙データを採集し、「狐仙DB」を補完したいと考える。

【注】

- 1) 中国民俗学界では、狐の嫁入りや狐の祟りなどの狐にまつわる話が「狐精故事」と呼ばれる。
- 2) 愛如生は1998年に設立した中国の企業で、当初は「北京愛如生文化交流有限公司」という名称だったが、2003年に「北京愛如生数字化技術研究中心」と変更した。北京大学、清華大学、中国科学院と中国社会科学院の技術を利用し



て、これまで「中国基本古籍庫」、「中国方志庫」、「中国類書庫」など14の大型データベースを開発した。データベースには、歴代古籍10万点、敦煌漢文文献3万点、金石文献20万点、明清檔案100万点、近代新聞3000点が収録されている。(http://er07.com/)

- 3) 『世界大百科事典 第2版』による。
- 4) 齊藤まや(2010)「地域の百科事典—中国の地方志と国立国会図書館における所蔵状況」による。
- 5) 中国の北方では、仙になった狐が「狐仙」と直接に呼ぶことは避けられ、「胡仙」、「大仙」などと呼ばれる。
- 6) 詳細は「URL:https://www.toho-shoten.co.jp/export/sites/default/er07/list/housiko1.pdf」を参考にした。
- 7) 「胡仙」というキーワードで検索したデータでは、狐と関係がなく、人名となる事例があるが、それらは全て「狐仙DB」から削除した。
- 8) 胡堃(1992)「中国古代狐信仰源流考」28頁による。
- 9) 李劍国(2002)『中国狐文化』204頁による。
- 10) 四大門とは、靈能力を持つと信じられた動物の総称で、狐狸(胡門)、黄鼠狼(黄門、イタチ)、刺猬(白門、ハリネズミ)、蛇(常門)の4種を指し、華北地域で広く信仰の対象とされてきた。

【参考文献】

(日本語)

- 瀧澤俊亮 1982 [1941]『満洲の街村信仰』 第一書房
内田智雄 1970『中国農村の家族と信仰』 清水弘文堂書房
山本斌 1975『中国の民間伝承』 太平出版社
胡堃 1992「中国古代狐信仰源流考」藤井良雄訳注、『福岡教育大学紀要』41(1):19-31
劉正愛 2003「動物信仰—民間信仰のもう一つの実態」、渡辺欣雄編『アジア遊学58 特集:路地裏の宗教』:153-164, 勉誠出版
齊藤まや 2010「地域の百科事典—中国の地方志と国立国会図書館における所蔵状況」、『アジア情報室通報』8(1):7-11
- (中国語)
- 山民 1994『狐狸信仰之迷』学苑出版社
李劍国 2002『中国狐文化』人民文学出版社
李慰祖 2011 [1941]『四大門』北京大学出版社
周星 2011「四大門:中国北方の一種民俗宗教」、李慰祖『四大門』:146-196 北京大学出版社

清朝、民国时期地方志中狐仙信仰的年代分布与地域分布 ——基于爱如生“中国方志库”数据库的考察

神奈川大学 博士后期课程 程 亮

前言

狐仙信仰是中国北方地区最为普遍的民间信仰之一。目前学界对于该信仰的定性、定义等诸多问题,虽然众说纷纭,但并没有形成较为一致的观点。

此前有关狐仙信仰的民俗学、文化人类学研究主要在中国的东北地区以及华北地区开展。笔者2014年至2017年前往狐仙信仰调查的空白地带——湖北省西北部山区进行了4年的田野调查,在十堰市W村、S村、H堡、L村采集了大量狐精故事¹⁾,同时进行了狐仙祭祀、邪症治疗的实地调查。

笔者进行的狐仙信仰调查,主要着眼于狐仙信仰的现状,并未涉及狐仙信仰的历史。因此,2016年11月15日至12月4日,笔者作为非文字资料研究中心的派遣研究员,访问广州·中山大学非物质文化遗产研究中心,对汉族狐仙信仰的历史文献进行了调查。同时为理清湖北地方文献中的狐仙信仰记录,笔者在此期间也前往武汉·湖北省图书馆地方文献部、十堰市图书馆地方文献中心、十堰市群众艺术馆非物质遗产保护中心、十堰·汉江师范学院汉水文化研究基地进行了文献调查。

本文将利用中山大学图书馆提供的“中国方志库”数据

库,以“狐仙”及“胡仙”的关键词检索并抽取的数据为基础,简单梳理了清朝、民国时期地方志中记载的狐仙信仰之状况。

1. 关于“中国方志库”

“中国方志库”(图1)是中国公司“爱如生(Erudition)”²⁾制作的大型数据库。该库收录了汉魏到民间初期的1万多种地方志类典籍,并附有原版图像。

地方志是一种“以州、县等行政区域为单位的综合性地理书”³⁾。后汉以后,出现了一些记述郡、国地理情况的书籍,附有简单的地图,称为“图经”。此外,还出现了记载特定地区的山川、风俗、古迹的地理书籍,称为“风俗传”、“风土记”。以上两类都算是地方志的原型。公元4世纪,汉族受到北方民族的驱赶,迁移至江南地区。于是,一些称为“某某郡志”、“某某州记”的以江南地区为描写对象的地方史书不断增多。地方志包含全国地理总志、各省府州县志、村镇里巷志、山岳川渚志、边防关隘志、都城坊肆志、寺观书院志、风俗乡土志,是详细记录中国的历史沿革、山川形势、行政建制、财赋收入、物产资源、人文景观、灾异祸乱、乡土风俗的珍贵资料。地方



志中收录的内容，不仅来源于地方的传承以及各地保管的公文书，还有不少来源于编纂人员的实地调查，因此是获得地方信息的可靠资料。

根据齐藤まや（2010）的调查，“地方志按刊行年代可分为2类。1类称为旧方志，是中国民国时期之前编纂的地方志。还有1类称为新方志，是1949年中华人民共和国成立以后编纂的地方志”⁴⁾。

“中国方志库”收录了汉代至民国时期刊行的旧地方志1万余册，版本图像数据（1200万页），文本数据（20亿字）。数据库可以输入任意关键词进行“区域检索”、“条目检索”（书名、作者、时代、版本、篇目）、“全文检索”，并带有简繁体字转换，标点·批注添加以及文本数据的保存·印刷功能。“中国方志库”将分为5集出版发售，每集收录2000册文献资料。目前，已经出版了2006年的第1集、2014年的第2集，预计2017年会出版第3集、第4集。

本次笔者调查的中山大学图书馆收藏有“中国方志库”第1集。根据图书馆的工作人员介绍，藏有“中国方志库”第1集、第2集的大学图书馆主要有山东大学以及中国人民大学两处。

2. “地方志中的狐仙”数据库

本文使用了中山大学图书馆提供的“中国方志库”第1集，以“狐仙”、“胡仙”⁵⁾的关键词检索·抽取数据，旨在整理这些数据的基础上理清清朝、民国时期地方志中记载的狐仙信仰之诸相。

“中国方志库”第1集中收录有宋、元、明、清以及民国时期的方志典籍，其中，明、清两代的典籍最多⁶⁾。使用“中国方志库”数据库的优势在于：可以网罗各地最多数量的狐仙记录。笔者得到中山大学图书馆的允许，利用“中国方志库”第1集制作了“地方志中的狐仙”数据库（以下简称为“狐仙数据库”）。

“狐仙数据库”的制作过程如下：首先，在“中国方志库”第1集中以“狐仙”的关键词检索出51个数据（图2、3），以“胡仙”的关键词检索出158个数据，共抽取事例209例。“狐仙数据库”的子项目包括数据库编号、原文（中文）、概要（日文）、时间、地区、作者、出典、版本。“狐仙数据库”中还删除了以下几类数据：

- a. 各子项目重复的数据
- b. 同一事例的数据
- c. 原文有缺失无法把握内容的数据
- d. 与狐、狐仙并无关系的数据⁷⁾

在删除上述4类共149个数据后，制作完成“狐仙数据库”（图4 事例60个）。

笔者利用“狐仙数据库”中收录的60个狐仙数据，从年代分布、地域分布、狐精故事的类型、祭祀类型、与邪症治疗的关联5个视角分析狐仙信仰的诸相。本文主要围

绕年代分布与地域分布进行考察。

3. 地方志中的狐仙信仰诸相

3.1 狐仙的年代分布

首先看狐仙事例的年代分布。图5是“狐仙数据库”中狐仙事例的年代分布图。在宋、元、明朝的地方志中，以“狐仙”、“胡仙”的关键词没有检索到狐仙事例。而在清朝的地方志中检索到11例，民国时期地方志中检索到49例。我们可以明显看出狐仙事例在清朝、民国时期分布最为集中。

为什么狐仙事例会集中出现在清朝、民国时期的地方志中呢？笔者认为这是因为在唐、宋时期流行的狐神信仰到了明、清时期逐渐式微，并以“狐仙”的形态在民间传播。换言之，狐仙这个概念在唐、宋时期的文献中并不存在，而在明、清时期形成的可能性较大。胡堃（1992）在论述明、清时期的狐信仰时说道：

然而从总体上看，明清狐信仰毕竟已走向衰落。唐宋人津津乐道的狐神在明清人眼里一文不值。狐再也不能雄居神的宝座独享被人顶礼膜拜的殊荣了。对狐神祸福于人之神力的怀疑与否定力量的增长，使其地位的跌落称为一种必然趋势。人们不再称狐为神，而仅冠之以“狐仙”之称。在他们看来，狐经过一定时间的修炼则可成仙。它可以变幻人形，具有多种神通，但绝不是施恩播福的神灵。由狐神至狐仙，不仅显示狐信仰在民俗信仰世界的降格，而且标志着中国古代狐信仰流变史的第三次重要转折⁸⁾。

胡堃（1992）认为中国古代狐信仰的流变史上存在3次转向。具体来说分别为：魏晋南北朝时期的狐妖人化（从自然界的动物转向为人间界的狐妖），唐朝的狐妖神化（从动物精灵、妖怪转向为具有人格的神灵）以及明清时期狐的仙化（由狐神转向为狐仙）。

“仙”是道教独有的观念，意为“在山中修行不老不死之术的人”。而道教“仙”的观念极有可能被民间的狐信仰所利用。人们认为，在山野间栖息的狐狸于山中常年修行，便会修得不老不死、千变万化之术，成为狐仙。李剑国（2002）的研究表明：狐仙概念的历史形成过程可以分为3个阶段。他认为，“狐仙观念始于唐，但唐代尚无‘狐仙’概念。在明代中后期有关狐修炼仙道的观念渐次强化，并且正式出现了‘狐仙’概念，到清代终于形成影响日渐广泛的狐仙崇拜。‘狐仙’成为对狐妖狐精最敬重的普遍称呼，还常称为‘上仙’、‘仙家’、‘大仙’、‘圣仙’、‘仙人’等等。”⁹⁾

李剑国的结论与笔者的统计结果基本相同。笔者推测，由于明朝地方志中记载的内容大多是前代的事情，因此明朝中后期逐渐强化的狐仙观念并没有反映到明朝的地方志



●表 1 狐仙事例的地区分布表

地区	东北地方			华北地方		西北地方		华东地方					华中地方		西南地方			华南地方	全国	
	辽 宁	吉 林	黑 龙 江	河 北	北 京	甘 肃	陕 西	福 建	江 苏	江 西	山 东	浙 江	安 徽	湖 北	湖 南	四 川	贵 州	云 南		广 东
事件数	18	9	6	2	1	2	1	2	2	2	2	1	1	4	1	2	2	1	1	
合计	33			3		3		10					5		5			1	60	

中，而是出现在了清朝的地方志中。与此同时，在清朝形成影响并日渐广泛的狐仙信仰则出现在了下一个时期，即民国时期的地方志中。

3.2 狐仙的地域分布

接下来看一下狐仙事例的地域分布情况。表 1 是“狐仙数据库”中狐仙事例的地域分布表。该表将地方志中记载的狐仙事例发生地转换成新中国成立（1949 年）后的行政单位。例如，地方志中的“泾县”转换为现在的“安徽省宣城市”，“房县”转换为现在的“湖北省十堰市房县”。如表 1 所示，关于狐仙的记录涵盖了几乎中国全境，包括东北地区（黑龙江、吉林、辽宁），华北地区（北京、河北、山西）、西北地区（甘肃、陕西）、华东地区（江苏、福建、山东、江西、浙江、安徽）、华中地区（湖北、湖南）、西南地区（云南、四川、贵州）、华南地方（广东）。其中，东北地区的黑龙江、吉林和辽宁最多，共有狐仙事例 33 个，占整体的一半以上。按省份划分，辽宁最多共 18 例。笔者调查的湖北省有 4 例，是除东北地区 3 省以外最多的地区。

以往的先行研究主要是东北地区、华北地区的调查。例如，泷泽俊亮（1941）与内田智雄（1970）关于满洲胡（狐）仙信仰的实地调查报告，刘正爱（2003）对辽宁省胡仙信仰的调查，李慰祖（1941）对北京西郊四大门信仰¹⁰的调查，山本斌（1975）对河北省胡仙信仰的记述，周星（2011）对河北省狐仙信仰的实地调查等。从上世纪 40 年代开始，狐仙信仰的实地调查基本上每隔 30 年就进行一次，分别为 20 世纪 40 年代（泷泽俊亮、李慰祖）、20 世纪 70 年代（内田智雄、山本斌）以及 21 世纪初（刘正爱、周星）。不过，上述调查报告均为民国时期以后的成果，并无涉及民国以前的记述。因此，笔者本次从清朝、民国地方志中检索·抽取出大量民国以前东北地区与华北地区的狐仙事例，希望对先行研究进行补充。

此外，清朝、民国时期的地方志中有 4 则湖北省的事例，而湖北省也是笔者进行田野调查的地区。不过，上述 4 则事例并没有记录狐仙祭祀的情况，只是记录了狐仙的附体、怪异等类似于“狐精故事”的内容。笔者调查的湖

北省十堰市 W 村也有类似的“狐精故事”。地方志中收录的资料很多都是编纂者实地调查得来的，因此清朝、民国时期湖北省地方志中房县部分资料从房县民间采集而来的可能性很大。笔者推测，W 村采集到的“狐精故事”极有可能经历清朝、民国传承至今。

结语

本文利用中山大学图书馆提供的数据库“中国方志库”第 1 集，以“狐仙 / 胡仙”的关键词检索·抽取出 60 则狐仙事例，理清了狐仙事例的年代分布与地区分布。

首先，我们看到狐仙事例集中出现于清朝、民国时期的地方志。笔者推测，这是由于清朝以前，包括明朝等时期的地方志记载的均为前朝事项，因此明朝中后期逐渐强化的狐仙观念并没有反应在明朝的地方志中，而反应在了清朝的地方志中。同样，在清朝深入民间的狐仙信仰也反应在了后一个时期，即民国的地方志中。

接着，我们发现关于狐仙的记述涉及

几乎中国全境，包括东北地区（黑龙江、吉林、辽宁），华北地区（北京、河北、山西）、西北地区（甘肃、陕西）、华东地区（江苏、福建、山东、江西、浙江、安徽）、华中地区（湖北、湖南）、西南地区（云南、四川、贵州）、华南地方（广东）。以往的先行研究中大多认为狐仙信仰是中国北方地区较为普遍的民间信仰之一，而根据清朝、民国的地方志记录，狐仙信仰不仅存在于北方地区，可以说是几乎覆盖了整个中国全境。

本文主要围绕狐仙事例的年代分布与地区分布进行了简要的考察。关于狐精故事的类型，狐仙祭祀的类型，与巫医治疗的关联等 3 个视角作为遗留课题有待进一步研究。此外，笔者希望可利用山东大学，中国人民大学图书馆所藏“中国方志库”第 2 集，采集更多有关狐仙的数据，进一步补充完善“狐仙数据库”。

【注】

- 1) 中国民俗学界将“狐魅人”、“狐作祟”等与狐狸有关的民间故事称为“狐精故事”。
- 2) 爱如生是 1998 年成立的中国企业，全名为“北京爱如生文



化交流有限公司”，2003年改名为“北京爱如生数字化技术研究中心”。该企业采用了北京大学、清华大学、中国科学院以及中国社会科学院的技术，至今已经开发完成“中国基本古籍库”、“中国方志库”、“中国类书库”等14个大型数据库。数据库共收录历代古籍10万册、敦煌汉文文献3万册、金石文献20万册、明清档案100万件、近代报刊3000种。
(<http://www.er07.com>)

- 3) 参见《世界大百科事典 第2版》。
- 4) 参见齐藤まや(2010)「地域の百科事典—中国の地方志と国立国会図書館における所蔵状況」。
- 5) 中国北方地区忌讳称呼成仙的狐精为“狐仙”，一般将其尊称为“胡仙”、“大仙”。
- 6) 详见“URL:<https://www.toho-shoten.co.jp/export/sites/default/er07/list/housiko1.pdf>”。
- 7) 以“胡仙”为关键词检索到的数据中，有部分与狐仙并无关系。这些事例均从“狐仙数据库”中删除。
- 8) 详见胡堃(1992)〈中国古代狐信仰源流考〉28页。
- 9) 详见李剑国(2002)《中国狐文化》204页。
- 10) 四大门是拥有灵力的4种动物，包括狐狸(胡门)、黄鼠狼(黄门)、刺猬(白门)、蛇(常门)。这4种动物在中国的华北地区受到广泛的信仰。

【参考文献】

(日文)

- 瀧澤俊亮 1941『満洲の街村信仰』 第一書房
内田智雄 1970『中国農村の家族と信仰』 清水弘文堂書房
山本斌 1975『中国の民間伝承』 太平出版社
胡堃著 1992「中国古代狐信仰源流考」藤井良雄訳注、『福岡教育大学紀要』41(1):19-31
劉正愛 2003「動物信仰—民間信仰のもう一つの実態」、渡辺欣雄編『アジア遊学58号 特集：路地裏の宗教』pp.153-164, 勉誠出版
齊藤まや 2010「地域の百科事典—中国の地方志と国立国会図書館における所蔵状況」、『アジア情報室通報』8(1):7-11

(中文)

- 山民 1994《狐狸信仰之迷》学苑出版社
李剑国 2002《中国狐文化》人民文学出版社
李慰祖 2011 [1941]《四大门》北京大学出版社
周星 2011〈四大门：中国北方的一种民俗宗教〉、李慰祖《四大门》pp.146-196 北京大学出版社

